

比較論的英米文学随想 (承前)

—『風と共に去りぬ』—

林 彦 一

はしがき

平成 13 年の 4 月から新学部の教養部に移籍、新たにできた紀要の方に投稿すべきだったのかもしれないが、先回の拙稿を二回続きのものとしてしまっていたので、一応、最後の論文として書くことにした（一応とは、旧英文科でもゼミを持ち続けているので、文学系の論文を書いた場合は、最後とはならないかもしれない、という意味である）。

今回は続きものと言ったが、内容は「最後」にふさわしいものであるようなので、何かシンクロ的なものを感じている。ということの意味は、私の拠って立つ基盤は「きびしさ」「ドン底」に象徴（要約）されるものであったが——吉田健一の「英国の文学」が英国の「きびしさ」を説くことから始まっている、私の出自は「ドン底」にある、は私の 18 番のセリフである——、前回の「アメリカの巨大」を受けて、今回取り上げるつもりであったのは「戦争」であったからだ。さよう、厳しさ・どん底と通底するも、並みのそれらではない「戦争」をコアとするものを、と書き始めたのが 9 月の 14 日——すぐにコンピュータが故障、一週間ほどの中休みがあったが——、ブッシュ大統領がいみじくも「戦争行為」と呼んだアメリカでの同時多発テロと蹀を接している。これもまた、シンクロであろうか。

これまでに書いたものの中だけでなく、日常生活においても、私は「批判する」ことの多い人間であった。ノーベル賞化学賞の受賞者・白川氏は、「批判力が創造に連なる」と述べておられるが、それは能力とか才能があつての話、私のような「ドン底」体験からの批判力は、「想像」に結びつくことはあっても「創造」には結びつかないと思っている。しかしその想像も「戦争」となると想像を絶してくる（「厳しさ」には対決で済み、「ドン底」からの浮上は大変ではあるが命には関係ない程度のものだ）。

(一)

実は自分では気づいていなかったが、前回の拙論における佐伯氏礼賛——『緋文字』をめぐるもの——と、ミッチェルの作品『風と共に去りぬ』の間には隔たりがあったのだった。氏がヘスター・プリンの堂々たる人間性にぞっこんだったように、私は『風と共に去りぬ』のレット・バトラーとスカーレット・オハラという人物に惹かれたままではいいとして、恐らく氏へのめりこみの故に「人物」に目が眩んでしまったのであろうと思うのだが、戦争が作り上げた人間ということはわかっていながら、その人物像の奇異なほうに目がいき、「戦争」ということが副次的になっていた。

今回ハッキリ判ったのは、1) 佐伯氏は「戦争」という視点が欠けている、2) 私がこれまで口にしてきた「厳しさ」「どん底」の、更に酷薄なものとして「戦争」があった、という二点だった。

「佐伯氏礼賛」、確かに前回、わたしは佐伯彰一氏をベタ褒めしたが、ただ一つ次のような皮肉とも取れる言い方をしている。

「現実感覚のホーソン」、佐伯氏の言葉を借りれば次のようになる。

題名の『緋文字』は、十七世紀のニュー・イングランド、清教徒の掟の支配するボストンで姦通を犯した女が、胸につけさせられる、真紅の A という頭文字を指している。そこで、これは一種の「姦通小説」なのだが、同じ五〇年代に書かれたフローベルの姦通小説『ボヴァリー夫人』、さらにはトルストイの『アンナ・カレーニナ』とは、なんという相違であろうか。後者いずれもが、姦通にいたる過程そのものを綿密にたどり、女主人公の心理の分析に重点をおいているのに対して、ホーソンは、まさしく姦通が終わった所から書き始めている。つまり、女主人公がいかにして、またどんな理由や環境で、姦通を犯すかという所には、作者の興味は存しない。彼のもっぱらかかわるのは、姦通が犯された以後の問題である。姦通とは、要するに罪の一形式にすぎないので、犯された罪が、当事者ならびに関係者に、いかなる影響を及ぼすかという所に、中心の問題があるのだ。人間はいずれにせよ、罪を犯さずにはいない。問題は犯した罪をいかにして贖い、また耐えぬくかにある。『緋文字』は、姦通女と、その相手と、夫という三つの基軸をおいて展開される、罪の意識をめぐる劇的対話とっていい。その際、もっとも見事な対応ぶりを示すのは、女主人公に他ならず、犯した罪ともっとも率直かつ全身的に向かい合った彼女は、ほとんど浄められた聖女の面影を帯びてくる。だが、そこまで読んできて、作者が果して清教徒的な罪の意識を、全的に肯定しているのか、それとも批判しているのか、という問いを発してみると、にわかに決め難いのだ。

(佐伯彰一『アメリカ文学史』、筑摩書房、'87年6月10日、初版第3刷、51頁)

そしてこの着眼点が佐伯氏にはよほど気に入ったのか、殆どそっくり後の方で繰り返される。

....ヒロインは、町全体の断罪に抗して、一步も退かない。みずからの姦通の結果を丸ごと肩にせおい、Aの緋文字を胸にかかげて、全力的に押し切ってゆく。いや、「姦通」という社会的、時代的な偏見を克服したなどというものではないのだ。彼女のエゴがそのまま丸ごと姦通という純粹運動と化して、凄まじい疾走をはじめるので、姦通という事実などいつか後方におき去りにされてしまうのである。フローベルの『ボヴァリー夫人』と同じ年代に書かれた姦通小説だが、姦通の心理描写などここにも見当らぬ。姦通とは、『緋文字』の作家にとって、エゴのエネルギー凝集、発現のきっかけというにすぎない。エンマ・ボヴァリーを一姦通にかり立てた夢の凡庸さと美しさを同時に見すえる底の複眼は、ホーソンには縁の遠い話で、彼に

としては、姦通のもたらす罪の重荷というバネがあれば足りた。一見すれば、姦通という罪を自覚し、まともに罪と向き合うことで、見事贖罪を果たした、悔い改めの聖女のごとくだが、『緋文字』の読後にのこるものは、もっとあらあらしく、不気味な、強大なエゴのうごめきといったものであり、裸のむき出しのエゴが恥かしげもなく眼前を突っ切ってゆく姿に息をのまざるを得ない。そこで、『緋文字』の作者にとって、「ヘスター・プリン、それは私だ」といった台詞を口にすることなど不可能であったろう。小説家として、ナイーブで無意識だったから、というのではない。『緋文字』におけるエゴが、余りにむき出して、野方図で、「私」などという枠におさまりかねるものだったためである。「私」というお行儀のいい規矩におさまるには、余りになまの無方向のエネルギーでありすぎた。

(同書、234頁)

これを書いた当時の私の意識は、ホーソーン以外に「全身的」「全力的」「強大なエゴ」等を見せてくれる作家はいないのか、この繰り返しはないぜ、というものだったろうが、先にも言ったように「目が眩んでいて」ハッキリとは自覚されていなかった。「そしてこの着眼点が佐伯氏にはよほど気に入ったのか、殆どそっくり後の方で繰り返される」という私のコメントの真意は、佐伯氏のこの繰り返しが気に入っていなかった、ということだ。それを気づかせてくれたのは、私の拙論を読んでもくれた学生時代の畏友からの便りにあった、佐伯氏の文体が「鼻につく」という一句であった。なる程そう言われればちょっといい気かなと思ったことが、私の謂わば潜在意識にあったものを浮かび上がらせてくれた、ということであろう。

要は、佐伯氏に繰り返しの代りに『風と共に去りぬ』を選んで欲しかった、なぜこれを選ばなかった？ということだ。読んでおられなかったということはないとして、純文学とは少し外れて大衆文学的に見られている作品なので——亀井俊一氏もそう仰っている——、こういうものを一段低く見る日本の文壇のせいもあるだろう。しかしわたしはこの作品が気に入り、これの方が『緋文字』より遥かによく、佐伯氏の言うアメリカを伝えているのでは、と思っている。その出自にあらゆる恐ろしいものを抱え込んだアメリカ人、凡そ内戦と呼ばれるものの中でも、かくも凄惨・巨大な内戦があったであろうか、と思える戦争、そういう中で生まれるべくして生まれた巨大なエゴとエゴの、想像を絶するぶつかり合い、このエゴを掴まずしてアメリカを語るか、というのがわたしの先ずは佐伯氏に対する反論である。

内戦と言った。これが日本人には凡そピンと来ないものである、という私の断言は、これまでしばしば「きびしさ」の欠落した日本ということでわたしが口を酸っぱくして繰り返してきたことと、歩調を同じゅうしている。敢えて云えば、「きびしさ」なら英国の説明に用が足りるが、アメリカでは単なる「きびしさ」では埒があくまい、ということだ。そこで本題に入る前に、わたしがかねがね敬服している林秀彦氏の文章をお目にかけておこう。

....一億一心の掛け声凄まじかった割りに、敗戦の日に自決した日本人の数は驚くほど少なかった。戦争に負けるということのスゴサを、今なお生活に溶け込ませながら実体険しつづけてい

る日本人は、本当にウブな国民だと思う。敗戦後の後遺症は、半世紀以上を過ぎてもなおジワジワとわれわれにダメージを与えている。こんな戦争体験を持つ民族は、人類の歴史で日本民族だけに違いない。ほとんど同時に戦争を起し、ほとんど同時に負けたドイツなど、今やけろっとしたもので、コソボに戦車を派遣したりして、実質的にはいつでもまた戦争をはじめてもおかしくない。

戦争に負けるということは、その負けた側がそれまで持っていた伝統的な価値観や規範をすべて一挙に失うということでは決してない。もしそんなことが起きていけば、有史来戦争ばかりしてきたユーラシア大陸にはどんな価値観も残っていないことになり、それらの積み重ねである文明も起きているはずもない。

むしろ逆で、彼らの間では戦争に負けるたびに新しい惜しみや復讐の念が育ち、そのエネルギーが固有の伝統的価値観に一層固執する結果をもたらす。アイルランド魂などはその典型かもしれないし、……

軽く言ってしまうと、世界のほとんどの民族は戦争慣れしているのだし、負け慣れしているのである。戦争に負けた途端、魔法のステッキの一振りみたいにしてすべての従来の価値観やアイデンティティが消え去り、その後それに代わる確固とした生活信条も生まれぬまま、縄文から一万年以上も続いた民族性まで失いつつあるような民族は、どう考えてみても日本民族しか思いつかない。大和魂など、影も形もなくなっている。それならいっそのことインカのように国ごとまるまる消滅してしまえばよかったと思うほどの悔しさと、不可思議さである。

とここまでで、日本の情けなさは十分に実感できるであろうが、以下魅せられるままに、氏の辛らつな言葉を拾っておく。

言うまでもなくアイデンティティを日本語にすると『同一性』とか『主体性』という言葉になるのだが、国家と国民が、文化としての民族的寄る辺を超え、文明としての主体性を持つプロセスのキーワードは、戦争であり、革命であり、独立といったものである。

……

見るも無残で滑稽な第九条に加え、日教組、朝日新聞、人権意識、平等意識、すべて日本人にとっては脇の下どころか、腕の付け根から溶けてしまうような劇薬デオドラントをフンドシの中まで DDT と一緒に振りかけられたのだ。

……

繰り返すとわれわれは異常なほどに恵まれていた。もしアイデンティティが他者からの侵略、略奪、抹殺などから培われるならば、そんなものないほうがずっとよい。しかしもうひとつわれわれの特殊条件を考えれば、知らなすぎたということであり、今でも知らなすぎる。世界を、である。考えるということは、比較するということだと私は信じている。アカデミックな解釈は知らないが、われわれは単一民族である。どこへ行っても同じ顔、同じ言葉、同じ食事が通用する。おや、と立ち止まらせるほどの比較対象もない。ということは、なにも考えていない

のである。

では、われわれは未だになにも比較しておらず、故になにも考えていないのではなからうか？

.....

私の世代は『鬼畜米英』で育った。これは今でも正しいと信じている。鬼畜という語感はいかがかとも思えるが、世界一のアホとも言えるほどにお人よしの日本人には、これくらいの表現でないとピンとこないだろう。アイデンティティも、寄る辺も、和魂も失ったわれわれにとっては、英米どころか、世界中の他民族は、皆様、鬼のように怖い方々なのである。これは永遠の真理である。戦うために言うのではなく、あらゆる面で対等に付き合うための貴重な標語である。

それもこれも、われわれがいまだに自生価値観を持つまでの成熟さを持っていないということに帰着する。つまり、比較し考えることが、一人一人の庶民レベルに定着していないということである。今の学校教育の、偏差値的、記憶術だけの勉強も、実は上意下達なのであって、福沢の本を読んだ人達と根本的にはなにも変わっていない。

.....

三百年近い鎖国は、われわれに世界観的な無知を与えた。しかし今、庶民レベルで、比較し、考えるチャンスが、時間、経済、共に備わった。日本の寄る辺は、今自発的に、しかも底辺から確認され始め、育ち始めている。

留学しているとはお世辞にも言えないような日本のハンパ者の若者が、世界に跋扈している。一見恥さらし、国辱的なこれらの茶髪ガングロどもは、しかしかつての吉田松陰や伊藤博文が果たし得なかった正道を探っているし、夏目漱石や新島襄が吸収し得なかった何物かを貪欲に吸収している。漱石のような繊細、神経衰弱的才はなくとも、厚顔無恥な鈍感さと、破廉恥極まりない蛮勇を持って、和魂の源泉を再確認しようとしている。....期待は彼らにしかない。それしかない。溺れるものの藁みたいなものだが、私は信じている。

[林秀彦「「デオドラント」された日本人」(『諸君』2000年7月号、所収)]

引用とも云えない長い引用だが、それも、わたしがこの20年近く、比較文学をやり始めてから繰り返し述べて来たことと違わぬ事が、またわたしの人間性も考えも一変せしめた当の思想いや事実が、かくも断言的に明確に語られていることの驚きと喜びのせいである——単なる雑誌に埋もらしてしまうのは勿体ないということもあった——。わたしが日本を批判し日本の多くの学者を批判したその依って来るものがここに見事に述べられているのである(学生から、先生は日本——の独特さ——がキライですか、と何度批判されたことか)。特に、教育において、最近の若者を批判することしかない教授たちに、林氏の最後の祈るような言葉を聞かせてやりたい。授業に出れば学生が「やかましい」、と云うことしか知らない教授たちに聞かせてやりたい。

問題は「戦争」だ。「戦争」の理解だ。そしてこれが決定的に欠けるのが日本人だから、『風と共に去りぬ』の解説に入る前に、あと二つほど、驚くべき「戦争」の効用？の話を紹介しておこう。しかも都合よく、そのうちの一つは「南北戦争」に纏わる話だ。

(二)

ここで取り上げるのは西部邁『戦争論』（日本文芸社）である。湾岸戦争の頃、つまり10年も前に書かれたものだが、絶対平和主義批判という副タイトルが示しているように、戦争礼賛（戦争を起こせというのではなく、戦争も必要悪とならねばならない人間の哀れさを書いている）の本である。（湾岸）戦争の前で呆然とする日本人を、「白痴以下であるということすらできる」という著者は、

誤解を受けるのを恐れずにいうと、私は、ある意味で、戦争が好きだ。いや、やはり誤解をさけるために慎重を期すと、戦争について感じたり考えたりするのが好きなのである。戦争は、生命という「生の基本手段」を危殆に陥らせる。だがそのことによってかえって、「生の基本目的」が那邊にあるか、あるべきなのかが切実な問いとして浮かび上がってくるのである。

（中略）

死を間近にしてはじめて生が輝く、という逆説から人間はついに自由になることはできないのではないか。戦争についての感受力と思考力と行動力を失った国民には、結局のところ、平和の有難味を知ることすら叶わぬのではないか。戦争という非日常性の事態に対応できないような人間は、裏を返せば、闘いと戦さの要素を含むのが日常生活であるという平凡な一事をわきまえておらず、それゆえその日常生活の中心には大きな空洞が穿たれているのではないか。

（「はしがき」より）

と胸のすくような所論を開示するが、「闘いと戦さの要素を含むのが日常生活である」はそのまま私が実感していることである。自らの空洞に気づかず、学生や若者の空洞に大声を上げる大人（教師）たちの群れ。

せっかく一章を設けたのだから、戦争をせざるを得ない悲しい人間の「定め」を説く文をもう一つ。「平和主義者とは、正義の戦争よりも不正義の平和をとる人」（109頁）から、

戦争のない状態は、場合によっては、ほとんど何人も我慢できないような劣悪状態でありうる
....（108頁）

という帰結が出るような矛盾を生きなければならない酷薄さ。

(三)

次は、戦争（南北戦争）で異常を来たした精神が、畏怖すべき文化活動を示した例。出典はサイモン・ウィンチェスター著（鈴木主税訳）『博士と狂人』（早川書房）。副題「世界最高の辞書OEDの誕生秘話」、帯に書かれた「辞書に取り憑かれた天才たちの奇想天外な物語」が示すように、文字通り気違いと天才は紙一重の話で、手っとり早く言うと、W・C・マイナーという刑事

犯（殺人罪）の精神病患者で——病院はパークシャーの、オックスフォードから 50 マイル離れたクローソンという寒村にある——、20 年以上も入院している男が、「OED の作成に最大の貢献をした一人で、この辞典の作成に中心的な役割をはたした」人間である、という世にも奇妙な話である。

結論から言えば、マイナーがそんな偉大な仕事ができしたのは、気違いのせいで入院したためであり、しかもその病気は先天的な面より「戦争」に負っていた、ということである。

該書の第三章は「戦争という狂気」という見出し。軍医として入隊したマイナーは、「繊細」「あまりにも礼儀正しい」「学究肌で本を読んだり水彩画を描いたりするのが好き」といった男なのに、「1864 年のヴァージニアはおとなしくてはやっていけないところだった」から悲劇は始まる。単なる内戦とは言えない残酷さと、それがマイナーの精神に及ぼしたあたりをザッと見ておくと（数字は頁数）、

応急処置のテント、...悲鳴と、低くすすり泣く声。それは、絶え間なくつづくむごい戦いのなかで、残酷な新兵器に命を脅かされた男たちのものだった。(68)

わずか 50 時間あいだに、猛烈な砲火でおよそ 2 万 7 千人が戦死した。この大きき戦いでウィリアム・マイナー博士の経歴にとくに重要な意味をもつと思われる点が、三つある。まず第一は、この戦闘の徹底的な残酷さと、戦場の無情な環境だ。(70)

この戦いなかで、マイナーの不可解な病状を理解するのに重要だと思われる第二の点は、戦闘に参加した一つのグループに関係する。それはアイルランド人だ。マイナーが異様に恐れているようだったと、のちにロンドンで家主が証言したのと同じアイルランド人である。(72) ——参考までに家主の言葉を見ておくと、「下宿にアイルランド人の使用者はいないか、いるなら首にしてみらいたい」と頼んだ (29)、というのがある——。

そしてこのアイルランド人は、「飢餓に苦しむアイルランドから来た新しい移民だった」ので、アメリカのために戦うことよりも、「憎むべきイギリスをアイルランドからいつか追い払うため」であった。だから、脱走と逃亡があり、その罪は死刑に値した。

マイナーが参加していた戦いで出た脱走に関して科された罰の一つが、「やがて精神に異状をきたすことになる第三の、そしておそらく最も重要な原因となった。」(74)

それは脱走したアイルランド兵に、命じられるままにマイナーが熱した焼きゴテを頬に押しつけた拷問で、これがマイナーの狂気の原因となったのだ。(78)

(四)

主人公スカーレット・オハラとレット・バトラー、何は置いても先ず、二人とも「戦争」的なものに彩られているということに注意がいく。それは一口に言って「戦争向きの人間」、つまり「世間並みに生き得ない人間」ということである。

とすると面白いことに我々は気づくことになる。阿部勤也氏によると、スカーレットとレットが教養人ということことになってしまうからだ。氏は、特に知識人といわれる人種が、全く無自

覚的に世間に依存し一人になったことがない、と『「教養」とは何か』（講談社現代新書）の始めのほうで（17頁）仰られた後、「教養人」とはこのような知識人と対蹠的な人間である、と言わんばかりの定義を該書の最後の頁で与えておられる。

教養があるということは最終的にはこのような「世間」の中で「世間」を変えてゆく位置にたち、何らかの制度や権威によることなく、自らの生き方を通じて周囲の人に自然に働きかけてゆくことができる人のことをいう。

とすると、それはスカーレットとレットの二人には関係がないじゃないかと思われる向きもあるかもしれないが、この阿部氏の定義は平和なときの話であることを忘れてもらっては困る。戦争状態の世間など変え得べくもないし、「自然な」行動など考えられもしない。それを考慮すると、この二人ほど世間に依存し得ず反抗しながら、同時に徹底的に世間に働きかけた人間もいないのではないか。教養というと人格者と同一視されがちだが、人格者は模範的な世間人のことではないか、と私は思っている。平和な時でしか人格者は存在し得ない、とも思っている。言い換えれば、戦時の人格者というのが教養人、ということか。

とここまできて、私の脳裏にはこの小説の副主人公とも言うべき、やはり二人（ペアー）の男女が浮かんでくる。スカーレットが遂に忘れることができなかつたアシュレと、彼と結婚したメラニーという女性。この二人も世間に依存しない個性を持っているも、スカーレットとレットのような戦う激しい個性ではなく、じっと耐える強靱な個性と言えよう。ハムレットの有名な独白「戦うほうが高貴なのか、忍耐するほうが高貴なのか」がこれに当たると言えばよいか。

そこで総括するなら、この小説の面白さはこの4人の人物の交流、対世間、そして戦争という非人間的な状況裡にあって、燦然と輝く人間性——教養とは輝く人間性のことだ——となる。このうち最後に挙げた人間性についてはひと一言い添えておく必要があるようだ。

戦争といえば殺伐で女子供に関係のない状況で、死しか考えられないのが日本人だが、教養人は物事を対概念で考える。そこで戦争・死という概念と対の、女子供・愛・生というものが大事な要素になってくる。問う、日本の戦争小説で恋愛が書き込まれたことがあったか。ヘミングウェイの戦争小説のなかの恋愛事件を日本人はなんとも思わなかつたのであろうか。日本の軍隊で、戦場で恋愛などと口にただけでも、営倉にぶち込まれたのではないか、なんたる軟弱ぶりだ、と。戦争という殺伐で死と隣り合わせの状況だからこそ、愛はより美しく、子供はより可憐さを増してくる、という発想は、遂に日本では無縁であろう。

勿論、単なる対概念の問題ではない。世間に組み込まれていないとは、言い換えれば孤独ということだ。人は絶対的な孤独では生きていけないとするなら、愛も女も子供も孤独なる人間が生き得るための必需品である。

スカーレットとレットを戦争的な人間ということから括ってしまったが、年令の差、男と女、勘当を食って全く寄る辺のない「すれっからし」と、わがままいっぱいにお嬢さん、等々の違いは当然ある。しかし、1) 世間的な規矩におさまらない、2) いざというときに力を発揮す

る、3) 腹の底から生きている、4) 自分という人間を誤魔化せない、自分（の感情）に忠実である、といった強烈な自我意識は同じ、これにレットは周囲が敵という意識から（より戦闘的な状況に生きているから）、1) 人間を瞬時に鋭く見抜く、2) 多様な人間性を示す、という特徴が付け加わる。

更に、以上のことだけでは深みがない。スカーレットとレットの親が、既に世間的な規矩に収まり切れない人間だったということの他に、作者は周到に遺伝——それも隔世遺伝という奴——を取り入れる。

（五）

人物の考察は後に譲るとして、ここでは物語りの中で最も重要なウエイトを占める「愛」と「子供」（愛の対象としての子供）を取り上げることにする（尚、これから先の本文中の括弧内の漢数字と算用数字は、大久保康雄／竹内道之助訳『風と共に去りぬ』、新潮文庫の巻数と頁数である）。

端的に言って戦争の中に咲く花が並の愛であるはずはない。それは何も南北戦争という字義どおりの戦争でなくてもよい（既に我々は日常を戦争と見立てたではないか）。

まず壮絶なのは、スカーレットの母。模範的な妻であり母であり、使用人からもスカーレットからも慕われてやまなかったエレンに、今なお、胸の奥深くに秘められた、不良青年の従兄弟への愛があったとは誰が想像し得よう。戦渦の最中にチフスで息を引き取る間際、寝台に起き直り、大きな声で、一、二度、「フィリップ！フィリップ！」（二、362頁）と叫ぶ……佐伯氏には悪いけど、この強烈な人間性の前には、公然と世間に胸を張るヘスター・プリンも影が薄れてくると言わざるを得ない。生前、夫との間に愛の面から見ておかしなところがあったか。もちろん何一つ不自然なところはなかった。心に秘めた愛（人）があったなどというところは微塵も表にでていなかった。畏怖すべき女である。死に臨んで初めて口にする嘗ての愛人の名。

母と娘に共通するのは「強さ」である。世間を超えたところもこの強さに由来する。この故に、彼女らが愛した男はある「弱さ」を持ち合わせていた。これは、スカーレットが生活のために、没落した生家を建て直すために、敢えて妹の婚約者を奪うのだが、その男が全く世間体を気にする情けない男として描かれていることにも現れている。

成就する愛も美しかろう。しかし、したたかな個性・自我を感じさせる愛は、実らぬ愛を保持し続けるところにこそ美しく且つ凛々しく咲く。母しかり、スカーレットのアシュレへの愛しかり、レットのスカーレットに対する愛しかり。この清冽（凄絶・凄烈？）さは、スカーレットが恋するアシュレを奪ったと感じているメラニーと深く結びつくところ——メラニーをバカにしたり、疎んじたりするも、却って運命的に強く繋がっていくところ、そしてメラニーに自分ない良さを見いだしたりするところ——、そしてアシュレしか目にはないスカーレットを愛し（いやこの男にはスカーレットのような女しか愛せないのだ）、アシュレの弱さを知っているがゆえに、余計につらいレットの姿等々に、見事に書き込まれている。

だが戦争は戦争的な人間を結びつけずにはいない。小さな出会いは何度もあったが、レットは

愛していることをおくびにも出さなかった。スカーレットのような女に自分が本当は彼女にメロメロということを見抜かれたら、身の破滅だということを知っていたからだ。しかし真剣に生きる人間にはシンクロと呼ぶしかない運命が訪れる。そしてこの小説では大団円が二回訪れる。一度目は当然のことながら、敗戦による破滅と「子供」が利用される。二度目はどん底から立ち上がろうとするスカーレットに、貴婦人にあるまじき行いと、世間が爪弾きを始める時。

北軍が攻めてくる、この恐怖は日本人には分かりにくかろう。ヤンキーの手に掛かって強姦される・殺される、そういう絶望の中にいたスカーレットの所にレットはやって来る（これもシンクロの例だが、これが働かないようでは愛しているとは言えぬ）。

[というところで所与の枚数も尽きたようだ。唐突だが、次回まわしということにする]